



泰山登頂紀
(その2)

いなふくクリニック
稲福 薫



岱廟から見た泰山（ここからあの頂上までが全行程になる）

方山に登ってはみたが、何も起こらなかつた。何だかほっとしたような拍子抜けのような気持ちである。帰りに地元のレストランで昼食を取ることにした。大陸地方だけに山の幸が主な食事である。北京料理の源流といわれる山東料理という分類に入るという。味はしつこくなく口当たりがいい。野菜や饅頭がおいしい。聞いてはいたが値段が安い。四人分の食事で五、六皿ついて全部で八百円ほどである。食事のあとに泰安市に向かった。今夜はそこで一泊する。泰安市は泰山の麓に広がるござっぱりした町で泰山登山客に支えられている。町の中央に岱廟という泰山を奉る廟がある。大変に広い廟で歩いてすべてを見学するとなると半日はかかるだろう。廟の中には秦の始皇帝が建てたという石碑があった。壁には何千年にわたって色々

な書家書いた石盤が飾られていた。素人の私にはその価値はわからないが文化大革命の時に傷つけられたものが多くあったのには心を痛めた。ホテルは泰山を背にした位置にあり、窓からその全貌が眺められる。ソファーにごろねをしながらしばしがめていた。やはり、圧倒的な存在である。突然思いついて持っていた本の裏表紙にスケッチを始めた。描いているうちに、何となく来てよかったような気がしてきた。夜は次の日に備えて早々と床についた
翌朝は五時に起きた。泰山は頂上までの階段が7,000段、全長20km、片道5～6時間の行程という。妻は足に自身がないということで安全のために中腹まで案内人の劉さんと一緒にバスで行ってもらうことにした。私は地図と水の入ったリュックを背負って一人でホテルを出た。朝

のひんやりとした空気が気持ちいい。泰山の頂上に雲がかかって見える。六時間後にはあの上に立っているかと思うと気がひきしまる。街を横切り、岱廟の横を通り過ぎるとやがて登山口がある。三百円ほどの入山料を払う。そこからは頂上まで延々と石段が続く。道の両側にはおみやげ品店が並んでおり、売り子が色々と声をかけてくるがそれどころではない。途中には廟あり、石碑あり、石創りのアーチあり、有名な松があり、と多彩である。何千年もの間に中国の人たちが手をかけ続けた史跡ばかりである。いたるところの岩には書が彫られている。書家には垂涎の場面だろうが、理解できない私には落書きにしか見えない。やがて林の中を通る。霧が立ち込め、雨も降り始めてきた。筋張った男たちが二人組になって籠を担いでいる。人を乗せて登る担ぎ屋である。周りでは大勢の人たちが頂上をめざしている。中には五歳ほどの子供もいる。首には魔よけなのか真紅のたすきをかけている。みんな元気いっぱい。感極まっただか、雄たけびをあげたり、ソプラノの高唱をしているものもいる。やはり、泰山は特別な山なのだろう。ずんずん歩く。ひたすら登る。そのうち足腰が痛くなりストレッチをする。まだ、一時間しかたっていないのに先が思いやられる。

二時間後にやっと中腹の中天門という場所についた。そこはロープウェイやバスの発着所になっている。妻との待ち合わせ場所であるが、まだ着いていないようだ。おみやげ品店が並び、食堂もある。これから先には食堂がなさそうなので待っている間に朝食を取ることにした。少ないメニューの中からうどんのような麺を注文した。まずい。麺は小麦粉の味がするし、スープは水のようなものである。そこで、テーブルの上に乗っている数個の調味料を手当たり次第突っこんでみたらまんざらでもない味になった。一時間後に妻と劉さんが合流した。劉さんは膝の調子が悪いといってロープウェイに回り、妻と二人で登り始めた。そこからの行程はきつかった。斜度が45度の階段が延々と続き、

しまいには60度にもなる。そこでは言うようにして登った。あそこの角を曲がれば頂上が見えるだろうと期待して登る。角に着いて見ると階段が先の角まで続いている。気を取り直して角の先に終点が見えることを願って登る。角に着くとまた階段。これを無限に繰り返す。下を振り返るとはるか地の底まで階段が続いていて、気が遠くなりそうになる。断崖絶壁に無理矢理階段を作ったようなものである。中国人の泰山への執念がわかるような気がした。足はもう棒のようになって痛み、4~5m進んでは立ち止まって、また進む。

とうとう頂上の入り口の南天門に着いた。天辺の位置には玉皇頂という廟がある。周りを散歩した。厚い霧がたちこめて視界は全くきかない。いたるところ岩がごろごろしているが意外にもろい。泰山は中国でも最古の造山運動によってできた山だという。小石をひろってしげしげとながめた。この手のひらに乗っている小石は人類が出現するはるか以前にできたものなのである。玉皇頂に参詣した。廟内は狭く参詣客でひしめきあっていて、炊かれた線香の煙でもうもうとしている。手をあわせると心が透明になっていくような気がしてしばしたたずんでいた。秦の始皇帝もこんな風にして手を合わせたのだろうか。

参詣が終わると昼食を取ることにした。山の上には意外にも西洋風の瀟洒なホテルがあり、そこで食事をした。色々と注文しているうちにとある魚をすすめられた。小さな水槽の中でひらひら泳いでいる赤鱗魚という赤いうろこが特徴の溪流魚で泰山名物だという。値段を聞いてびっくり。一匹が五百円ほどだという。しかもそれがメダカより少し大きい程度である。先ほど紹介した一般の食事の値段と比べるとおそらく世界一高い魚だろう。そんなにもめずらしい魚なら食してみたいのだがなにしろ高い。結局、一匹だけ注文した。待っていると店員が持ってきた。いくらなんでもメダカ一匹ということはない、サービスで二、三匹は持ってきてくれるだろうとの下心でいたが、やはり一匹しか

こなかった。春雨のフライの上に「こんな私を食べるの?」と言いたげに情けなくちょっと載っている。それを三つに分けて頭は自分が、劉さんが胴体を、妻は尻尾を食べた。何のことはない。いつも子供と釣ってくる小魚のから揚げの味である。隣のテーブルの男性客はそれを皿いっぱい注文して一人でぱくぱく食べていた。まるで五百円が次から次へ、口の中に飛び込んでいくように見える。あんな風にして食べないと味もわからないのだろうが、貧乏育ちの私はたとえ生まれ変わっても真似ができそうにない。帰りはロープウェイとバスを乗り継いであつという間に麓についた。バスの中での足のけだるさが心地良かった。妻はあの苦しい行程の中でふと山肌に見かけた白い花がいつまでも心に残っているという。翌日無事帰途についた。

結局、意外なことは何一つ起こらなかったが、不思議なことに時が経つにつれこの旅が骨身に沁みってくる。帰ってからは開業の準備に追われる毎日だったが、何かの折りに、ふと方山や泰山のことが思い浮かべられる。クリニックの方は今まで順調に来ており、たとえトラブルが起こっても心のどこからか「なんで、いいさー。なんくるないさ (いいじゃないか。何とかなるさ)」という言葉がふっと出てきて深みに

はまらなくなった。そして、開業して仕事を進めるにつれ、自分の歩むべき道が次第にはっきりわかってきた。こんな心境の変化が目に見えない御利益なのだろうか。そうならばありがたいことである。それにしてもいいタイミングで声をかけてもらったものである。人生の節目で人はとかく心を惑わされ道を誤りがちになる。そんな時に、どこからか本来の道に導いてくれる何かの力が働くような気がする。それは自分でも気がつかないほど体の奥深くに作用するので、その時には気がつかずあとあとになって骨身に染みてくる、そんなものではないだろうか。それが人の命運を左右するような気がする。そんな力の恩恵に与るためにも、自分を取り囲むすべてのものに謙虚に耳や心を傾ける気持ちを持ち続けることではないだろうか。ところで、妻はもう一度行って今度は麓から登ってみたいと言っている。話を持ち込んだ女性だが、今ではまた沙汰無しの状態にある。それにしても、あの夢に出たというひげのおじいさんはいったい誰だったのだろうか。まあいいか。謎のままにしておこう。この世は不思議に満ちているのだから。

終り

原稿募集!

随筆のコーナー (2,500字以内)

随時、募集いたします。日常診療のエピソード、青春の思い出、一枚の写真、趣味などのほか、紀行文、特技、書評など、お気軽に御寄稿下さい。